

社会的性格とスポーツ

藤原 健 固

〈論文内容要旨〉

行動は哲学に支えられており、スポーツは人間に働きかけて人間および社会を変革する。ここで「変革」という場合、それはスポーツの社会的機能を指しており、正機能と逆機能を含んでいる。すなわち、スポーツは人間に働きかけて良くも悪くも人間および社会を変革し得るのである。

スポーツの社会的機能の一つの領域が、社会的性格に及ぼす問題である。本稿では、社会的性格に及ぼすスポーツの機能を実証的に研究する際の理論的背景を論じた。その際、スポーツ(集団)に参加することによって、成員の基本的パーソナリティがどのように影響されるか、が問題となる。この点に関してスポーツマン的行動が、文化や集団の影響および社会心理学的な領域の側面から考察の対象となる。こうした観点から、次の諸点が明らかにされた。

(1) スポーツマン的行動の社会学的側面を全体的に把握しようとする場合、行動に働く社会学的要因に注意を払うべきである。

(2) スポーツ集団の社会的性格は、個々の成員のパーソナリティの総和ではなく、集団の機能との関係で考察の対象とされなければならない。

(3) スポーツ集団の社会的性格の構造と機能について、構造の構成要素および種々の次元での機能を相互補完的にとらえること。

(4) スポーツ集団の社会的性格の形成と変容は、スポーツ集団の課題遂行機能と集団維持機能の遂行と直接関係しており、とくに後者からのアプローチが主題となる。

(5) スポーツ集団の社会的性格の測定は、集団維持機能と集団の基本的パーソナリティに向けられる。

Social Character and Sport

Kengo Fujiwara

The action is supported by the philosophy, and sport can be changed man and society through work upon a human being. At this time, the meaning of "change" indicate the social functions of sport which is including normal-function and dysfunction. Namely, sport can be functioned rightly or badly.

One of the social functions of sport is the potential of sport for social character. In this monograph, the present writer argued the theoretical background the time when it is studied positively. At that time, the main question is that how the basic personality of the member can be affected by take part in sport (group). On this subject, the action of sportman must be viewed from the influence of culture and group or the sphere of social psychology. From these points, some findings are as follows.

(1) The primary sociological factors are very important key for the whole grasp of the sociological action of sportman.

(2) The social character of sport group is not the sum total of member's individual personality, but is considered in

connected with functions of sport group.

(3) The structure and function of social character in sport group is studied by make clear the structural factors and the functions in various diemensions mutually within sport group.

(4) The formation and change of social character in sport group have an immediate connection with the task-performance function and group-meintenance function in sport group, and our principal subject is based upon the later one.

(5) The measurement of social character in sport group is proceeded to two parts; one is the group-meintenance function and the other is the basic personality of sport group.

1 スポーツマン的行動の 社会学的理論

(1) スポーツマンの「行動」とその社会学的側面 「行動」とは、一般に「動機づけられた生活体が、先行条件に規定されておこす反応の全過程」¹⁾を指す。われわれの関心は、他のスポーツマンや第三者を媒介としない単独のスポーツマンの行動ではなく、有意味的 (sinnhaft) な関連をもった複数のスポーツマンの行動に向けられる。すなわち、目標が社会的対象 (他者) である社会的行動 (Social behavior) を扱うのである。

スポーツマンにとって先行条件としての環境の作用にたいする何らかの反応 (response) がスポーツマン的行動であり、それは基本的には各々のスポーツマンの個体的条件によって変わるものである。この場合、社会的環境の作用にたいする複数のスポーツマンの反応を相互作用 (interaction) と呼ぶことができる。それはスポーツマン A の反応がスポーツマン B にとっては刺激であり、B はそれに対する反応を行うと

いう形で社会的行動をみせることを意味する。換言すれば、 R (反応) = f (S 刺激) という図式が、より社会的環境のなかで検討されなければならないのである。²⁾

いうまでもなく、現実のスポーツマンの行動は複雑なメカニズムのうえに成り立っているものである。それ故、アプローチの仕方も多様となる。ここではスポーツマン的行動を生起させる要因や反応の過程を個々のスポーツマンの側 (行動の主体の側 <subject side>) における調査・資料を中心に、スポーツマンの行動を全体的に社会的環境との関係から追求する立場をとりたい。このことは心理学的立場が個体の自己完結的過程として行動をとらえ個体が経過する変化を一本の流れとして追求する傾向を濃くするのに対し、われわれの立場はより社会学的立場から社会的側面を重視し行動の客体の側 (subject side) に主たる関心が向けられることを意味する。しかしながら、両者の立場は共に相反するものではなく相互依存적であり相互補完的でなければならない。この意味で主体の側 (subject side) の考察も重視すべきであり、具体的には主として社会的性格に及ぼすスポーツの逆機能 (第3節) のなかで扱われるであろう。

(2) 二人集団 スポーツマンをとりまく社会的場面の構造 (他者の存在) との関連をみることに、それがスポーツマン的行動の社会学的側面であるという場合、分析上の単位として二人集団がとりあげられなければならない。それはスポーツ集団の如き直接的接触 (face-to-face relationship) を基軸に維持される集団においては、とくに二人集団がそのユニットとして重視されるからである。

二人集団における社会学的研究の萌芽は、ジンメルに求めることが可能である。かれは二人の関係の本質的な類似性に注目し、相互依存の重要性に目を向けた最初の社会学者だと言える。その後、二人集団の研究はダイアド (dyad) 論として、ウィーゼ、³⁾ ベッカー、⁴⁾ シアーズ、⁵⁾ パーソンズ、⁶⁾ ライリー、⁷⁾ ガイガー、⁸⁾

などによって研究されてきた。まず、社会学的範疇としての概念をガイガーに求めたい。

ガイガーは人間の行動を二つに大別して考える。すなわち、一つは自己を他人より区別する自他分離の行動であり、二つは自己を他人と融合させる自他合一の行動である。かれはこの人間の行動のパターンを二人集団と一般集団に対応させ、二人集団は特定の個人の人格性と不可分な固有の意味をもつ関係であって一般集団にみられる集団内部の構成員の代替性を有しないものと規定している。このことはスポーツ集団において顕著である。それはさきに指摘した直接的接触に負っている。また、二人集団においては当事者の一方がその関係から離脱することは、集団そのものの消滅を意味するのである。

つぎに、ベッカーは二人集団を社会的行動のもっとも微視的な一般的モデルとして概念的に抽象化している。かれによれば、二人集団とは時間的な経続性と相互作用のパターン(すなわち、共通の規範)を有する相互に密接な関係にある二人結合を指している。

また、ウィーゼは二人集団の本質的な特徴を人格的な個人と個人のつながりに求めている。さらに、シアーズは心理学の立場から二人集団を取り上げたものであり、その他多くの研究者がこの問題に関して論及しているが、およその図式としては図1の如くである。⁹⁾ 図1において、自我(スポーツマン)と他者の関係を結ぶシンボルは、実際には態度と役割を含んだものであり、これらの過程が何度もくり返されることによってスポーツ集団の最少結合としての両者のダイアド関係(二人集団)が確立するのである。

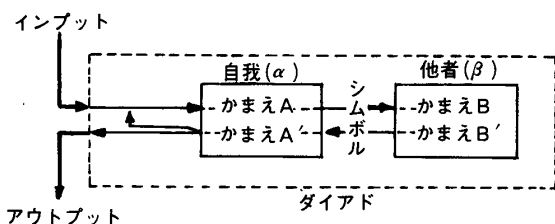


図1 ダイアドにおける相互作用

しかしながら、二人集団はスポーツをとりまく複雑な人間関係の支配する現代社会にあって、高度に抽象化されたモデルにすぎない。そこで、実際の社会生活の場面での二人集団の一般化が問われなければならない。その場合、二人集団における他者をより一般化することが、解明の手がかりとなろう。

(3) 一般化された他者 二人集団における他者をより一般化すること、それは一人の他者を多数の他者に拡大することを意味する。一般化された他者 (generalized others) の概念は、ミードによって提出されたものであり、現代社会学の共通財産の一部を構成している。すなわち、個々の社会的状況のなかで個人の果たす役割が全体的に認識されたとき、かれは一般的他者としての性格をもつのである。例えば、プレイヤーがコーチを個々の役割においてではなくコーチとしての一般的な役割として全体的・統一的に認識するとき、コーチはプレイヤーにとって一般的他者となるのである。そして、一般化された他者は、所属する全社会集団に拡大され、やがて個人は一般化された他者の役割を身につけるようになる(他者の役割取得)。「子供が他者の態度を取得し、自分のやろうとしていることが他者の態度によって共通の目標との関連からきめられることを認める限りにおいて、かれは社会の有機的なメンバーとなりつつある。すなわち、子供はその所属する社会の風紀をひきつぎつつあり、その社会本来のメンバーとなりつつあるのである。自分の取得している他者の態度によって、自分自身の表現が統禦されることを認める限り、かれはその社会の一員なのである。」¹⁰⁾

一般化された他者の存在がスポーツマン的行動を決定する、というとき現代社会の複雑な人間関係を背景にしたスポーツマン的行動を理解することが可能となる。この問題に関連して、パーソンズは一般化された他者という用語に代えて内面化された価値基準 (internalized value standard) という用語を用いている。かれによれば、個人が内面化された価値基準を犯し

た場合、自我自身が違反者であると同時に監視者であるという二重の感情を有し罪の意識となってあらわれるのである。¹¹⁾ そして、かれは個人の内面化された価値基準が監視者の機能を果たすところに、行動が制度によって統合される基本原理(行為要素の制度的統合)を位置づけるのである。このことは、スポーツマンにとってかれの内面的な価値基準が行動を規制し、それがスポーツ集団の諸々の規則によってコントロールされていることをみるとき明らかである。

(4) 社会学的行動理論の定式化 スポーツマンの行動の社会学的側面を全体的に把握しようとする場合、スポーツマンの行動に強く働いている社会学的諸要因を抽出し相互の関係を定式化することが必要である。すなわち、スポーツマンの社会学的行動理論の定式化が必要なのである。

(独立数変) (媒介数変) (従属数変)
 生物学的影響力 \ 社会的影響力 / 動機・態度など → 社会的行動

図2 行動の図式 (ニューカム)

ニューカムは、¹²⁾ 「社会学的」社会心理学の立場から、行動の定式化を扱い図2の如く図式化している。かれは唯一の観察可能な変数として行動をとらえ、且つ他の変数によって規定される従属変数であるとする。そして独立変数として個人の諸性質と相互作用からもたらされる社会的影響力を設定する。しかし、独立変数が直ちに従属変数によって規定されるのではなく、中間項として動機・態度という媒介変数をおくのである。そして、この媒介変数に重点をおき従属変数としての行動をとりあげるのである。そこで、かれが「動機」というとき、それは「身体のエネルギーが発動されていると同時に、環境の部分に対して選択的に向けられているような生活体の状態」¹³⁾ を指す。すなわち、それは動因 (drive) と目標指向を含む概念として考えられている。また、かれが「態度」というとき、それは瞬間的・特殊的な個人の潜在

的性向としての動機の背後にある動機をひきおこす前提(準備・性向)を意味する。そして、これらの媒介変数としての動機・態度は、集団における役割体系および規範体系のなかで具体化されるのである。

しかしながら、動機と役割に関してパーソンズ¹⁴⁾ は、より一歩すすめて行動を主体の側と客体の側に大別して考えている。すなわち、一つはモチベーションの側面であり、二つは価値の側面である。前者は要求=性向 (need-disposition)¹⁵⁾ によって、後者は規範 (norm) あるいは価値基準 (value standard) によってあらわれる。そして、行動はこれら両者を含み、且つ他者との相互作用によってすすめられるところから、他者との関係で果たす機能を役割 (role) として位置づけるのである。

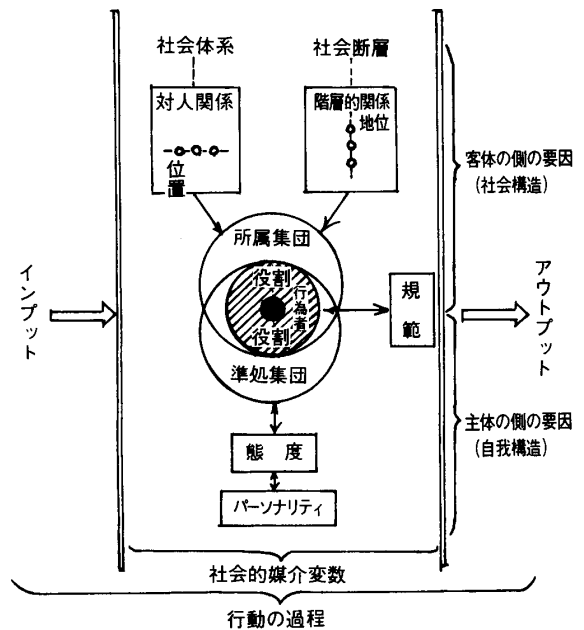


図3 社会学的行動理論の図式

スポーツマンの行動の社会学的側面を全体的に把握しようとする場合、スポーツマンの行動に強く働いている社会学的諸要因を一つの図式に定式化するとおおよそ図3の如くである。¹⁶⁾ 相互作用としての社会的行動(スポーツマンの行動)をおこすエネルギーの起動力は、多くの場合外部から与えられる(インプット)。そして、

外部から（他者との関係で）与えられた種々の社会学的要因の結果、相互作用としてのスポーツマン的行動がみられるのである（アウトプット）。この際、スポーツマン的行動は二つの要因によって規制・決定される。すなわち、一つは客体の側の要因であり、二つは主体の側の要因である。

まず、客体の側の要因は所属するスポーツ集団の社会構造を指している。すなわち、スポーツマン的行動——役割——スポーツ集団（a. 対人関係、b. 階層関係）という系列（スポーツ集団の社会構造）を構成するのである。この際、対人関係の社会的構造単位を **position** と呼び、階層的関係のそれを **status** と呼ぶ。常に **position** は **status** を含み、**status** は **position** を形づくる。地位と役割 (**role and status**) は、スポーツマンにとって複数なのが普通であり、同一個人内において相互の地位と役割の遂行がバランスを保っていることが重要である。しかしながら、複雑な現代社会にあってこのバランスは、しばしば崩される危険性を有していると言わなければならない。

つぎに、主体の側の要因は、スポーツマン的行動——役割——準拠集団——パーソナリティという系列を指しており、自我構造を構成する。この際、準拠集団はスポーツマン的行動を決定する際のスポーツ集団外の集団であり、そこでの地位と役割（多少のズレがあるのが普通）を矛盾することなく遂行しなければならないのである。そして、それは態度およびパーソナリティを背景に行なわれる。

客体の側の要因と主体の側の要因には共に社会構造および自我構造を構成するが、現実のスポーツマン的行動は、プレイヤーの所属するスポーツ集団の社会構造がより個人的次元での自我構造に大きく影響を及ぼすのである。

その際、それが現実の社会的行動としてあらわれる場合、スポーツマン的行動を規制する規範 (**norm**) のフィルターをくぐらなければならない。規範は、スポーツマンにとって内面的な力としてまた外部からの客体的存在として作

用する。しかしながら、規範は社会的文脈のなかで決定・構成されるのが普通である。

しかしながら、以上の如く、スポーツマン的行動の社会学的側面をスポーツマン個人の次元およびプレイヤーをとりまく社会構造との関係に求め、それが規範を通過したとき実際のスポーツマン的行動となり得るという場合、もっとも注意しなければならない点は次の点である。すなわち、客体の側の要因も主体の側の要因も共に分離独立して存在しているのではなく、相互に密接な関連性を有しているという事実である。

2 社会的性格の概念

(1) パーソナリティと社会的行動 スポーツマン的行動の社会学的考察において、パーソナリティの概念はその前提をなすものである。それは、パーソナリティが人間の社会的行動の個人的な特徴を意味するからにはほかならない。

社会的人間としてのスポーツマンは、自己のおかれた状況において各々独自の反応を示す。「十人十色」という用語は、状況との関係において示す反応が社会的な生活経験を異にする個人によって同一ではあり得ないことを物語っている。この点について文豪トルストイは簡潔に次のように述べている。「人間は河のようなものだ。河は同じ水でできてはいるが、ただその中のあるものは河巾が広く、あるものは狭く、あるものは緩やかに、あるものは速い。またあるものは温かく、あるものは凍っている。人間もまた人間としての総ての性質の萌芽をもちながら、その中のあるものが表われたり他のものが表われたりする。そして、自ら異った表われ方の習性をもっているものを示している。」¹⁷⁾ すなわち、「自ら異った表われ方の習性」は、自己の社会的な生活経験との対応においてもたらされるものであり、パーソナリティを意味するのである。

「自ら異った表われ方の習性」は、「心理・身体的体系としての個人内の力動的体制」¹⁸⁾ を形

づくり、それがスポーツマンの状況に対する独自の反応の仕方を決定するのである。それ故、パーソナリティは、「個人の行為の体系」¹⁹⁾であって、直接認知できるものではなく、比較的持続的な態度・動機・欲求など諸々の体系として考えられる。

「個人の行為の体系」としてパーソナリティは、感情、気質、性格 (character) から構成されている。そして、性格がパーソナリティの中核に位置する。それは性格が行為を決定する際の最大の要因を形成するからである。すなわち、性格は個人の欲求構造の体系 (system of need-disposition) なのである。この際、欲求構造とは、パーソンズによれば、個人がその内部的なエネルギーと個人をとりまく社会的・規範的要請により、他者および自然的・文化的事象に働きかけ自己を関係づけるプロセスは定位 (=行為) と呼ばれるが、一定の状況の中で定位 (=行為) をおこない、その結果自己と他者および自然的・文化的事象との関係を確保しようとする傾性を指す。²⁰⁾

それ故、「個人の行為の体系」としてのパーソナリティの中核としての性格は、個人が社会に適應する様式のシステムの中核を占めるものであり、個人に固有の独自の心的状態の組織的集合体の中核であって、道徳的・倫理的な価値判断を含んだ人格という用語よりも個性という用語に近いものである。「性格という用語は、多義的で誤解されやすい。日常用語や哲学・倫理学の分野ではこの用語は道徳的な意味を含んだものとして使われ、精神分析学ではパーソナリティの深層をなす基礎的側面を指す」²¹⁾ものとされる。それ故、パーソナリティ自体の概念も価値判断を伴ったものではなく、結果として生じたものを指す。

しかしながら、スポーツマン的行動が社会的文脈の中に位置づけられ、スポーツマンをとりまく社会 (スポーツ集団および準拠集団) の規範の許容範囲内で評価されることも事実なのである。そして、「個人の行為の体系」は生物学的個体としてのスポーツマンではなく、社会的

人間としてのスポーツマンとしてとらえられなければならない。それはスポーツマン的行動²²⁾が単なる生物学的欲求に基づくものではなく、多くの場合社会的な状況との係わりで位置づけられるからである。スポーツマンの行動は他の人々の刺激を通してのみ発達するのである。すなわち、生物学的基盤を離れた人間の行動は、学習されたものであり、主として他人との関係から学んだものである。

逆説的にこれを証明する一つの事例は、インドのある村で発見・保護されたところの狼に育てられた二人の子供の場合である。二人の子供は、保護された後数年の間人間に育てられることになったが、その行動は普通の人間の場合と非常に異なったものであった。²³⁾ それは狼の文化を身につけた結果であり、行動が学習によるものであることを逆説的に証明するものである。すなわち、新生児は、ひとり離れて生存し得る本能的な知識・能力を持ち合わせていないのである。かれは他との関係において文化を獲得し社会的人間となるのである。このような観点から、社会は個人の行為の集合ではなく相互作用の集合であると考えられる。この際、他との関係はコミュニケーションを通じて行なわれ、家族がその基本的場を提供する。

(2) 集団構成員に共通の性格構造としての社会的性格 以上の如く、パーソナリティは「個人の行為の体系」であり、「性格」はパーソナリティの中核にあって行動を決定するところの個人の欲求構造の体系 (system of need-disposition) である。しかしながら、われわれはスポーツマン個人に持ち前の「性質」 (individual character) を問題にするのではなく、一群の人々に多かれ少なかれ共通して認められる「社会的性格」 (social character) を主として問題にするのである。とは言っても、個々の「性格」を事例研究的にとりあげることは社会的性格の解明に必要であろう (第三節)。

社会的性格の概念は、二つの系譜を有している。一つは文化人類学のそれであり、二つは精神分析学のそれである。前者はルース・ベネディ

クトの「文化の諸様式」(patterns of culture, 1934)を中心とした一連の研究領域で位置づけられたものであり、後者はリントン、カーディナー、フロム等の新フロイト学派によって位置づけられたものである。また、前者はマクロ的史観に基づくものであり、後者はミクロ的な人間観にその基盤をおいているとも言えよう。これら二つの系譜を統一的にとらえ直し、より精査を期するべく努力したのがフロムである。

フロムの社会的性格は、①ひとつの集団構成員の大多数によって共有される、②その集団構成員の性格の本質的中核であり、③家族内での思考様式・行動様式の共通性の所産であって、④個人のエネルギーを人々の相互関係の中で要求される社会的要請に適応させる役割を果たすもの、と規定される。²⁴⁾しかしながら、フロムの社会的性格の定義には、集団の規模の問題、家族の有する機能と主として機能集団とそれとの関係の問題等の未解決の分野を残している。しかし、われわれは一応この定義を認めたうえで次のように規定することが可能であろう。

すなわち、「スポーツ集団の大多数のメンバーが共通的に分有している性格構造の本質的な中核」を社会的性格と規定する。そして、この社会的性格はスポーツ集団のメンバーに共通する基本的経験と生活様式の結果発達したものである。すなわち、スポーツ集団内の思考様式・行動様式の体得の結果として社会的性格が決定されるのである。また、さきに指摘した家族の有する機能と機能集団のそれとの関係の問題について二つの点を明らかにしておく必要がある。一つは、家族の果す役割において幼児期のリビドーの抑圧、その固着や転移によって性格を問題にするのではなく、スポーツマンの個人対個人、個人對自己、個人対外社会といった社会関係のなかで問題をとらえる必要があることこの点はフロムも述べているところであり、このことが新(或いは修正)フロイト主義と呼ばれる一つの根拠を構成する。しかしながら、この観点での考察は本論の直接の対象ではない。二つは準拠集団との関係において、ス

ポーツマン的行動を決定する諸要素を各々数えあげ社会的に処理することは、それ自体不可能なことであり、問題を複雑にするばかりである。それ故、われわれの立場はスポーツ集団という一つの典型的な集団をとりあげ、限定された領域で考察をすすめるのである。

3 スポーツ集団における社会的性格の構造と機能

(1) 社会的性格の構造 スポーツ集団のメンバーの大多数が有している性格構造の本質的な中核としての社会的性格は、およそ次の諸項目の有機的な関連、からみ合いであり相対的に首尾一貫した統合体として考えられる。すなわち、スポーツ集団の社会的性格の構造は、集団の慣習、特性、動機・態度、観念・イデオロギーなどの構成要素が相互に有機的関連をなし相対的に首尾一貫した統合体を指す。

(a) 慣習 (custom) 個人的次元での習慣 (habit) は、学習によって後天的に獲得され、反復を通じて固定された行動様式である。そして本能と区別される。それは本能的反応をもたらす刺激のみではなく、本能的な反応の仕方それ自身が集団の規制を受けているからである。また、習慣は以前に成功した行動のくり返しの中に一定の形式が決まるものであって「第二の天性」とも呼ばれる。しかし、それは個人の次元のものであり、集団を問題にする場合社会的な性質をもつ慣習 (custom) が問題となる。慣習は、いわば「集団の習慣」である。慣習は社会関係としてとらえられるものであり、個人に対して外在的な制裁力をもつものである。

しかしながら、習慣と慣習を区別すると言ってもそれは相対的なものにすぎない。なぜなら、習慣は慣習を前提にしている場合が多く、慣習は習慣によって維持されるからである。

(b) 集団の特性 (trait) 慣習が一定の秩序のうちに集団のメンバーに影響を与えるとき集団の特性を形づくる。例えば、練習の前にゴ

ミを片付けるとか拭掃除をすとかいったスポーツ集団内の慣習は、清潔にするというその集団の一つの特性を形づくる。すなわち、特性はある集団において観察可能な行動様式の性質である。

また、スポーツ集団の特性はその集団の社会行動にとって直接重要な役割を果す中心的特性と、あまり重要ではない間接的な周辺的特性とが考えられる。そして、前者がスポーツ集団の伝統を形成するのである。

(c) 集団の動機・態度 (motives and attitude) 動機は、行動の原動力となるものであり、欲求 (need) とそれをコントロールする意志から成り立っている。また、動機は人間が社会生活を営む過程で欲求をコントロールするために生まれてきたものであり、この意味ですべての動機は社会的である。すなわち、生物学的次元でのスポーツマン個人の欲求は、社会的なスポーツ集団の次元での動機のなかで社会化されるのである。そして、社会的な動機は直接的には集団のそれを指す。

態度は、行動に対する準備状態であり、「社会的価値の個人内の心的反映」(トマス)であり、「個人がかかわりを持つあらゆる対象や状況に対するその個人の反応に、指示的或いは力学的な影響を及ぼす、経験により体制化された、心的・神経的な準備状態」²⁵⁾ (G. W. オールポート) である。また、態度の重要な一つの機能は、社会的対象に対する行動を規定する枠組として作用することである。それ故、態度は社会(集団)の支配的な態度と一致するとき安定する。換言すれば、態度はスポーツマンを行動動因と結びつけると同時にスポーツ集団の規範とも結びつけるのである。

スポーツ集団の動機・態度の概念は、スポーツマンの社会的行動(従属変数)が社会学的要因と生物学的要因(独立変数)によってどのように影響されるかを、媒介変数(動機・態度)を通して明らかにされるという意味で重要である。

(d) 集団の観念・イデオロギー (idea and

ideology) 観念は社会的行動を決定する際相互作用の過程において規範・価値の体得の結果構成された規準である。

また、イデオロギーは社会現象に対する判断の体系であり、実践的・選択的・評価的な態度を含む。

スポーツ集団の観念・イデオロギーは、そのメンバーの行動を決定する際の基本的要因を提供する。それは基本的思考様式としてのスポーツ集団の観念・イデオロギーがその集団の行動様式の根本原理を構成するからである。

以上の如く社会的性格の構成要素を考えるとができるが、重要なことはこれら個々の構成要素が個々に存在するのではなく現実の社会的性格はこれらの諸要素が有機的に関連し合いながら一つの統合体をつくりあげていることである。

(2) 社会的性格の機能 それ故、社会的性格は、その機能との関係において理解される概念である。スポーツ集団のメンバーは所属集団の要求に応えることによって、その機能的なメンバーとなることが許される。そこでスポーツ集団の社会的性格の機能は、およそ次の三つの如く考えられる。① スポーツ集団の欲求を各スポーツマンに内面化することによって、スポーツマンの行動がスポーツ集団の特性に一致するか否かを決定する。そして、② メンバーが行動しなければならないように行動することをスポーツ集団の次元で自ら欲し、同時に、③ スポーツ集団の要請に応え、調和して行動することが満足をもたらすように、メンバーのエネルギーを形成する。換言すれば、スポーツ集団の社会的性格の機能は、外的な必要性をスポーツマン個人の内に取り入れ、かれのエネルギーをスポーツ集団の一定の課題に準備させることにある。

社会的性格の有する機能を日常生活に求めてみると、主として(a) 障害への適応、(b) 葛藤の解決、(c) 人間関係への適応があげられるであろう。

(a) 障害への適応 スポーツマンが新しい

社会的環境を迎えた場合、社会的性格が一つの適応の仕方を提供もしくは示唆する。それはスポーツの技術的側面および人間的側面双方において認められる。とくに後者の場合、なかんずくスポーツマン相互の調整が失敗をくり返えすとき、スポーツマン個人のパーソナリティは不安定の度合いを増す。このようなとき、スポーツ集団のもつ社会的性格が一つのよりどころとしてスポーツマンの前にあらわれるのである。

スポーツ集団における障害は物理的、心理的、社会的なものを含むがその除去に際して、それが目標指向的であるか脅威指向的であるかによってスポーツ集団の社会的性格の果す機能もやや変ってくる。すなわち、目標の獲得が危険を伴わず努力、忍耐などの手段によってそれを手に入れることが可能な場合、スポーツ集団の社会的性格そのものは動揺をきたさず、その機能は正常に働くのである。これに反し、目標の獲得が危険を伴い通常の行動ではそれを手に入れることが不可能な場合、スポーツ集団の社会的性格そのものの価値が問われ、その機能を正常に保つことは困難となる。それはこのような脅威指向的な障害除去は、スポーツ集団の維持を脅かし、しばしば「攻撃」か「あきらめ」という別方向に分裂しやすいからである。それは「あきらめ」が、目標を手に入れること以上に危険を避けることに重点がおかれることを背景にしている。また、「窮鼠猫をかむ」の例えの如く、「攻撃」は障害除去にたいする積極的行動を背景にしているのである。

障害除去に対するスポーツ集団の社会的性格の機能を取りあげる際、脅威指向的なそれが問題になる。すなわち、それに対する姿勢は「攻撃」か「あきらめ」という別方向をとることは、いまみたとおりであるが、重要なことはそれが相互補完的であり多くの場合ワン・セットで見られるということである。例えば、肉体的精神的訓練が過度にプレイヤーに課せられた後の、反社会的行為がこれを示している。それは、とくにのりこえなければならぬ技術の体得を障害ととらえることによってスポーツの技術的側

面が過度に目標を構成する場合にしばしばみられる現象であるけれども、スポーツの場でのリーダーに対する「攻撃心」を軸にする場合しばしばこの傾向がみられる。しかし、プレイヤーは直接「攻撃心」をあらわすことが許されない場合が多い。そこでフロイトのいう「置き換え」が登場するのである。それは一種のハッキリであり、攻撃を許されないものから攻撃可能と知覚されるものに攻撃目標が転嫁されることを意味する。しかし、それはスポーツマン個人の外にだけ求められるのではなく、時としかれの内部に向けられる。これが「自虐」である。それは攻撃を自己の他に求めることができない場合の、攻撃の一つの形態である。このようなとき、スポーツ集団の社会的性格は動揺しその機能を正常に果すことは困難となる。しかし、多くの場合、これを救い正常に戻すのは集団の課題達成機能であり、スポーツの場合その技術的側面を介して行なわれるのが普通である。

(b) 葛藤の解決 スポーツマン個人の欲求は、個人レベルでのものと社会的レベルのもの双方の融和したものである。とくに後者の場合、多元的な社会規範・価値の体系のなかで多様な地位と役割 (role and status) が個人に寄せられているのである。その際、社会的レベルでのいくつかの地位と役割の取得において欲求相互の葛藤が生ずるのである。欲求充足が他者との関係を前提としている限り、スポーツマン相互の社会行動において葛藤が展開するのは容易に理解されるところである。

葛藤 (conflict) は、通常、「二つ以上の互いに相容れない欲求が同時に存在し、一方の欲求充足が他方に欲求不満をもたらすため、そのいずれにも決しかねる状態」²⁶⁾ を指す。そして、それは社会的背景のうえに展開されるのが普通である。

スポーツマンにとっていずれにも決しかねる欲求が目標指向的であるか、脅威指向的であるかによってスポーツ集団の社会的性格の果す機能も異ってくることは「障害除去」の場合

と同様である。すなわち、スポーツ集団における欲求充足が「魅力感」(目標指向的欲求)対「魅力感」の葛藤である場合、スポーツ集団の社会的性格の機能は正常に機能するのである。例えば、スポーツマンが休日に映画を見に行こうか釣りに行こうかと決しかねる状態において、スポーツ集団の社会的性格は動揺をきたすことはないのである。しかしながら、「脅威感」(脅威指向的欲求)対「脅威感」の葛藤である場合、スポーツ集団の社会的性格の果す機能は動揺し危機にさらされる。例えば、スポーツマンが体力以上の練習を強要された場合、かれのとるべき手段は他のものにたいして「攻撃」的に振るまったり、逆に「あきらめ」るかのどちらかである。このような場合、スポーツ集団の社会的性格は統一を欠き動揺するのである。

しかしながら、実際の葛藤は目標指向的欲求および脅威指向的欲求が上記の如く単純にみられるのでなく、相互のからまりをみせているのが普通である。例えば、ある事柄が二つの相反する欲求を内包したのものとして知覚される場合がある。それは選択の手段が二つの相反する欲求をとともに受信するか、拒否するかのいずれしかないような場合を意味している。スポーツマンにとって試合に出場することに「魅力感」をもちながらも、ミス・プレーを恐れる「脅威感」を拭いきれない場合などが、この例である。この場合、かれにとってどちらか一方だけを受容し他方を拒否することは許されない。こうした次元で、スポーツ集団の社会的性格の機能がかかわりをもって来る。それはスポーツ集団にたいする「ずるいチーム」だとか「臆病なチーム」といった表現のなかに汲みとることが可能である。

また、実際にみられる多くの葛藤は、上記の「脅威感」と「魅力感」の重複した葛藤が複数であらわれて、そのどちらかの選択を迫られる、といったものが普通である。例えば、スポーツマンにとってA、Bどちらの試合に出場すべきかの決定に迫られている場合など。その際、かれはA、B双方の出場に「魅力感」をもちなが

らも、同時に出場することによってもたらされる「脅威感」を抱いている。この場合、選択の基準は脅威と魅力の総合的秤量に立たざるを得ない。この場合、かれはA、Bどちらを選択しても脅威から逃れることはできず、この葛藤のパターンは選択が二者択一的脅威に直面している点に特徴をもつ。

以上の如き葛藤の四つのパターンにおいて、最初のを除いてすべて脅威を伴うものである。脅威からもたらされる焦燥と不安の解決にあたって、社会的性格が何らかの機能を果す。スポーツマンにとって日常の行動は、これら焦燥と不安の解決にあたって何らかの新しい行動を生みだすことを意味している。とくに、試合にたいする不安が、スポーツマンの練習意欲を高め密度の高い練習に向かわせる如きよい例である。

葛藤の解決に際して、時としてとられる方法は「抑圧」である。スポーツ集団において個々のスポーツマンの欲求をすべて充足することは不可能である。そこで、種々の欲求のうちからあるものを選び出したり、時期を遅らせたりする。それはスポーツ集団の直面する技術的な課題遂行を軸として行なわれる場合と、人間的側面を軸として行なわれる場合とがある。前者の場合、スポーツ集団の社会的性格は時として個々のスポーツマンの欲求を抑圧し集団目標の獲得に機能する。その際、物理的な力を伴いがちである。また、後者の場合、時として個々のスポーツマンの欲求充足に焦点が合わせられる結果、集団目標が稀薄になる。とくに前者の場合、抑圧は過度の緊張を生みスポーツマンをしてその行動の特異性に気づかせない状態をもたらすことがある。これが *sub-culture* であり、しばしば指摘されるスポーツマンの一見奇妙な行動様式がこれを物語る。こうした *sub-culture* は集団の団結をはかり、翻って社会全体の統合に寄与する場合も認められる。

また、社会的性格の機能は、スポーツ集団内の葛藤の解決において抑圧という形をとる場合、しばしば欺瞞性と意識の虚構性を伴う。そ

これは抑圧された欲求を間接的に表現する際の合理化に負っている。例えば、スポーツ集団におけるフラストレーションの解消にみられる変装および自己満足などがそうである。

以上の如き葛藤の解決においてスポーツ集団の社会的性格は、何らかの機能を果し得る。しかし、葛藤が解決されないで持続的に経過するような場合、スポーツ集団の社会的性格は統一を欠き、動揺をきたすのである。そして、スポーツ集団における諸々の環境的条件に対応する機能を失うのである。

(c) 人間関係への適応 スポーツ集団においてスポーツマンは各々地位と役割 (**role and status**) を有している。地位と役割は自己と他者を区別するもっとも大きな要因である。スポーツマンは、この基準によって所属するスポーツ集団の社会的性格の機能を受容するのである。すなわち、各スポーツマンは自己の地位と役割を知っているだけでなく、他のスポーツマンのそれをも知悉することによって、常に人間関係の調整をはかっているのである。この際、スポーツ集団の社会的性格は大きな機能を果し得るのである。

人間は「自己に対する他人の反応に照して自己の行動を決定する」(G. H. クーリー) という場合、それは「同調」、「対立」、「離反」という三様のパターンをもっている。²⁷⁾ すなわち、プレイヤーがコーチ、先輩等の「鼻いき」を伺いながら、行動の基準を「同調」に求める場合、かかるスポーツ集団の社会的性格は上の者に対しては卑屈なほど従属し権威に弱いパターンを示すのである。スポーツ集団の社会的性格が「同調」的色彩を濃くするとき、スポーツマンに対する機能はスポーツマンをして他人への追従、同調、屈従という行動をとらせる側面で機能する。しかし、こうした行動は、下の者に対して傲慢な態度をとらせることが多い。すなわち、「同調」型の場合、同調すべき人々と、支配し得る人々の中間に自己が位置するのである。

また、「対立型」の場合、スポーツマンは他者との間に対立・緊張関係を持ち、他者をライ

バルとして位置づける。この場合、スポーツマンもしくはスポーツ集団は他者との正常なコミュニケーションを断ち切る形で自己の行動を推進する。例えば、閉鎖的な練習に対する非難を自己および自己のスポーツ集団に対する攻撃と解し、より閉鎖性を増長する。この姿勢を持つ中でモラルを高めようとする。それは他との対立関係を維持することによって、不安と孤独からの解放を求めて行動を高める背水の陣を背景にしている。「対立」型の行動は、その背後に無力感と依存の欲求を抑圧しているものである。

さらに、「離反」型の場合、スポーツマンは他者との間に一定の情緒的距離を設定し、自己を孤独と孤立の状態におく。そして、「対立」するでもなく「同調」するでもない。実際には、スポーツ集団においてはこういうパターンはほとんどみられない。それはスポーツ集団への参加が「熟慮の結果」のものであり、そこでの人間関係が直接的な顔と顔とをつき合わせた関係 (**face-to-face relationship**) に基づくからである。

以上の如き「同調」、「対立」、「離反」のいずれのパターンをとるにせよ、それらは個々に明確な形をとる以上に相互補完的である。その際、スポーツ集団の社会的性格が機能を果し得るのである。

4 スポーツ集団における社会的性格の形成と変容

(1) 形成と変容について スポーツ集団における社会的性格の形成は、価値基準や行動様式のスポーツ集団内での確立過程を示している。また、その変容は従来の思考様式・行動様式が適用できない局面を迎えたとき、新しい思考様式・行動様式をスポーツ集団にとり入れ局面打開をはかり、且つそれがスポーツ集団にとってこれからの正式の思考様式・行動様式となる場合にみられるのである。

ほんらい、スポーツ集団の社会的性格は、ス

スポーツの技術的側面と人間的側面を獲得していくうえでその集団にとって適合するように形成される。しかしながら、スポーツ集団にとって何らかの状況の変化を迎えたとき、社会的性格は変容を遂げ新しい状況に適合するべく再編成される。さもなければ、状況不適應をもたらすスポーツ集団の社会的性格は統一を欠き動揺を免れ得ない。例えば、スポーツ集団内でのレギュラー集団とイレギュラー集団の葛藤・反目および新しい状況にたいする対処の仕方が細分化し集団として分裂を招く場合など。とくに、スポーツ集団の場合、こうした現象が一般社会と相容れない方向でみられる場合が少なくない。そして、そのことがスポーツ集団の体質という形で問題視されるのである。

以上の如く、スポーツ集団の社会的性格はスポーツ集団の課題達成に合致する思考様式・行動様式をつくりあげる過程で形成される。しかし、新しい状況への適合に際して既存の思考様式・行動様式が採用されない場合新しい思考様式・行動様式を求め変容を遂げるのである。

(2) 社会化 (socialization) ここで社会化という場合、それはパーソナリティの形成を社会の側からみた場合の用語であり、「個人が特定の原則的価値体系を受け入れ、この社会のうちに組み入れる過程」²⁸⁾を指す。と同時に、この用語は生物学的個体としての未成熟な個人が社会的人間に成長する過程で種々の能力を獲得していくことをも意味する。

社会化は生得的条件と社会的条件によってすすめられる。とくに後者の場合スポーツマンにとってかれの所属する下位集団(家族、近隣集団、職場集団など)の影響を大きく受ける。下位集団は、全体社会の価値体系のなかに位置づけられてはいるものの、各々独自の思考様式・行動様式の基準をもっているのが普通である。そして、スポーツマンは常にその所属するいくつかの集団において特定の地位を付され役割を果たすべく要請されているのである。

スポーツマンが役割を果たすべく行動する際、それはスポーツ集団のもつ規範・価値の補強と

いう方向ですすめられることは既述のとおりである。それ故、社会化にとって所属する集団の影響は大きいといわなければならない。すなわち、スポーツマンにとってスポーツ集団内で社会的役割を遂行するべく位置づけられており、このことを通じてかれは社会的自我を育てるのである。

以上の如く、スポーツマンは全体社会の枠内で、直接的には下位集団の影響を受けながら、スポーツ集団の社会的性格を身につけるのである。それ故、かれにとってスポーツ集団の社会的性格のもつ影響は無視できないものになる。それは多くの場合、他のどの下位集団よりもスポーツ集団内の相互交渉の方が密度が高いことに因っている。この際、所属するスポーツ集団が統一的な価値体系に支配されているような場合、スポーツマン相互の社会的性格は相互に類似し且つ限定されたものになってくる。しかしながら、スポーツ集団をとりまく全体社会は、社会構造の複雑化を機能の分化によってスポーツマンに多様な下位集団への参加をもたらしている。そして、個々の下位集団は各々特有の社会的性格を有しているのである。そして、時として下位集団間において価値体系の対立と矛盾をさえ示していることも事実である。

(3) 主体と状況 スポーツマンにとって幼年期の遊戯集団から成人期における交際関係にいたるまでの第一次集団(primary group)のもつ影響は大きい。スポーツマンはその成長過程に応じて種々の集団に参加・脱退をくり返すが、スポーツ集団以外の下位集団の規範・価値体系が大きく影響をもつ場合がある。これがレファレンス・グループ(reference group)であり、スポーツマンにとってスポーツ集団以外の学校集団、年令集団、地域集団などがこれを代表する。それ故、スポーツ集団の社会的性格の形成と変容においてレファレンス・グループは、一定の機能を有しているといわなければならない。

すなわち、スポーツマンは全体社会の構成員として共通のパーソナリティをもちながらも、

スポーツ集団やその他の下位集団の社会的役割の相違によって独得のパーソナリティをもつのである。それは役割と期待の相違によるものである。しかしながら、現代社会の如く集団への参加・脱退を頻繁にくり返すことによって身分や地位が固定せず常に変化しているような社会にあっても、スポーツマンが一定期間特定のスポーツ集団に所属することによってかれはその集団内の役割と期待にふさわしい思考様式・行動様式を身につけるのである。とくにスポーツ集団のように直接的接触を基軸とする集団においてはそうである。

スポーツマンはスポーツ集団や社会生活の種々の場面で特定の位置 (status) を占めており、それによって一定の役割 (role) を分担し遂行する。そして、この役割の遂行を軸としてスポーツ集団の社会的性格が形成され且つ変容されるのである。

(4) 変容と社会的風土 スポーツ集団はメンバーにたいしその自由を容認し、その個性を發揮させつつも、基本的には統制 (コントロール) を課している。そして、統制から逸脱するとき社会的制裁が加えられるのである。

スポーツ集団における社会行動を分析する際の一つの側面は、その人間関係をみることである。それはスポーツ集団の社会的性格の変容にかかわっており、主として二つの社会的風土のパターンに求められる。一つは権威的な風土であり、二つは民主的なそれである。

(a) 権威的風土 権威的風土は、封建社会の人間関係に顕著である。それは忠・孝の精神のうえに築かれたものであり、絶対服従と義務の遂行を内容とする。それは典型的な上意下達型コミュニケーションに基づくものである。

わが国におけるこうした権威的風土は、徳川時代の忠・孝の精神が明治時代に至って忠君愛国のイデオロギーと化し教育制度と徴兵制度がこれを支えたと考えられる。戦後、民主主義が導入されたが、従来の権威的風土は一朝にして行動の転換には至らず種々の問題を投げかけているのである。

スポーツ集団においても、この傾向を指摘し得るのである。とくに、スポーツマンをトータルな人間として指導・育成する過程において種々の問題点を内包しており、時としてスポーツ集団の封建的体質が議論の対象になるのである。例えば、人間にとって顔は身体のうちでもっとも意識とプライドが集中しているところであるが、これに対する殴打が無抵抗・無批判の前提でおこなわれるとすれば、結果として自尊心の放棄、人格の軽視、暴力肯定、批判精神の欠除などをもたらす現代社会において批判されるべき社会的性格が形成されることになるであろう。そして、ともすると上に弱く下に強いスポーツ集団の社会的性格を形成し、その民主的変容を困難にさせているのである。

(b) 民主的風土 終戦を期にいわゆるアメリカの民主主義が導入された。それは人間を人間として認めるという前提に立っておりこの意味で権威的風土と異なるのである。すなわち、理性を尊重し、行動は自主的にコントロールされる。そして、ここでの人間関係は倫理としての忠・孝の精神も義務と権利という関係でとらえられ契約論的考え方が採用されるのである。しかし、その相違が非常に大きかったことと導入があまりにも性急であったために、ちょうど松に竹を接木した如く、民主的風土は従来の権威的風土に必ずしも適切になじまず種々な問題を生じさせたといえる。

スポーツ集団においても大勢は民主的風土を容認し、その方向での努力が傾けられているとはいえるものの、現実には問題点を多く抱えているといわなければならない。

以上みてきた如く、スポーツ集団は課題遂行機能 (スポーツの技術的側面) と集団維持機能 (スポーツの人間の・社会的側面) の遂行によって合致する社会的性格を形成する。そして、新しい状況に際し自らの社会的性格が通用しない場合その変容をもたらす。しかし、こうした社会的性格の形成と変容は、集団独自の状況から歴史的な社会変動にいたるまでの多様な状況のなかで行なわれるのである。

5 スポーツ集団における 社会的性格の測定

スポーツ集団の社会的性格は、集団の機能との関係でとらえられるものである。それは社会的性格が、集団の機能と常に対応したものであることに求められる。とくにスポーツ集団の集団維持機能との関係が重視されるべきである。

スポーツ集団の社会的性格は、主として三つの研究領域を含んでいる。すなわち、①社会的地位からみた社会的性格、②身体活動の上達・興味の推移からみた社会的性格、③スポーツ集団への参加からみた社会的性格、である。①は、すぐれて階級・階層的視点からのものであり、②は主として学習および小集団論を背景にしている。そして、われわれが扱おうとする主題は③にある。

スポーツ集団への参加からみた社会的性格を社会学の立場から問題にする際、スポーツ集団の社会構造との関係において研究することが必要である。具体的には二つの要件を満たすことが要求される。一つは、スポーツ集団の社会構造の測定であり、主として集団維持機能 (group maintenance performance) の類型化を明確にすることである。二つはスポーツ集団の成員の個々のパーソナリティを測定し総和を以って集団間の相違の有無をみることである。そして、重視すべきは、スポーツ集団の社会的性格が機能との関係で把握されなければならないという点である。

まず、スポーツ集団の社会構造の測定は、その集団を維持していくパターンの様式をみることである。具体的にはリーダーの選出方法 課題解決の方法などがあげられる。

つぎに、スポーツ集団の個々のパーソナリティを測定し、総和を求める。この際、種々の測定方法があげられる²⁹⁾ けれども、「心理学的目録法」を採用したい。具体的には、C. P. I (California Personality Inventory) による調査を実施する。とくに C. P. I を採用した理

由は、調査が簡便であり且つ調査結果の指標が社会的であることによる。³⁰⁾

こうした手続きの背景には、次の如き問題意識が含まれている。すなわち、特定のスポーツ活動があるタイプの人々をひきつけ得るのか否か、また、特定のスポーツ活動が人々のパーソナリティに共通の特性をもたらし得るのか否か。そして、更に期待される社会的人間としての基本的パーソナリティ (社会的性格) にスポーツは如何なる機能を有しているのか、そしてその要因は何か、といった問題に答えることである。

- 1) 有斐閣「社会学辞典」1958. p. 28.
- 2) C. H. Graham, Visual Perception, 1951, In S. S. Stevens (eds), Handbook of Experimental Psychology, p. p. 868-920. によれば、 $R=f(a, b, c, \dots, n, t, \dots, x, y, z)$ という関式を提出している。(R=反応, a. b. c. ……=刺激の側面, n=回数 of 要因, t=時間の要因, x. y. z=個体の条件)
- 3) Leopold von Wiese, System der Allgemeinen Soziologie, Zweite Aufl., 1933.
- 4) Howard Becker & Ruth Vseem. "Sociological Analysis of the Dyad." Amer. Sociol. Rev., 1942.
- 5) Robert R. Sears, "A Theoretical Framework for Personality and Social Behavior." Amer. Psychol., 1951.
- 6) Talcott Parsons & Edward A. Shils, "Values Motives and system of Action," Parsons & Shils, (eds.), Toward a General Theory of Action, 1951.
- 7) Matilda W. Riley, J. W. Riley & J. Toby, Sociological Studies in Scale Analysis, 1954.
- 8) 上田一雄「二人関係」『社会科学大事典』第16巻, 鹿島研究所出版会, 1970. p. 56.
- 9) 富永健一。「行動の理論」『講座社会学』Vol. 1, 東京大学出版会, 1970. p. 82.
- 10) George H. Mead, Self, and Society: From the Standpoint of a Social Behaviorist, 1934.

- 11) Talcott Parsons & Edward A. Shils. (eds.), *Toward a General Theory of Action*, 1951, p.142.
- 12) Theodor M. Newcomb, *Social Psychology*, 1950.
- 13) 同 上, p.80.
- 14) Talcott parsons, *The Social System*, p. p. 16—17.
- 15) 生物学的な必要性および社会的欲求を充足させようとする潜在的傾向。
- 16) 富永健一, 「行動の理論」『講座社会学』Vol. 1 東京大学出版会, 1970, p. 105.
- 17) 稲葉信龍「個性」塙書房, 昭34. p. 133.
- 18) G. W. Allport, *Personality ; A Psychological Interpretation*, New York : Henry Holt and Co., 1937.
- 19) T. Parsons and E. Shils (eds.), *Toward a General Theory of Action*, 1952, p. p. 114—116.
- 20) 同 上。
- 21) O. Klineberg, *Social Psychology*, 1954, p. 378.
- 22) 「行為」(action) および「行動」(behavior) という用語に, 各々特別の意味をもたせる必要を認める理由は薄いように思われる。
- 23) A. ゲゼル, 生月雅子訳「狼に育てられた子」新教育協会。
- 24) E. Fromm, *Escape from Freedom*, 1941.
- 25) 有斐閣「社会学辞典」1958, p. 592.
- 26) 同 上, p. 109.
- 27) Karen Horney の分類による。
- 28) 鹿島研究所出版会「社会科学大事典」Vol. 9, 1970, p. 281.
- 29) 例えば, 心理学的目録法の他に, 面接法, 観察法, 評定法, 投影法など。
- 30) しかしながら, C. P. I は, その解答に虚偽がはいり込み得ること, 質問内容が被験者によって種々に解釈され得ること, 被験者は正確に答えられるほど自分自身を充分知っているとは限らない, などの欠点も有している。